

神奈川県平塚支援学校 学校運営協議会 開催結果

本校の学校運営協議会を下記のとおり開催しました。

会議名称	令和7年度 平塚支援学校 第1回 学校運営協議会
開催日時	令和7年6月6日(金) 9:30~11:30
開催場所	会議室
出席者	学校運営協議会委員:(敬称略)渡部匡隆会長、定成幸代副会長、松戸結佳、石井育代、熊澤惇、久光陽一、高田君恵校長 事務局:木村副校長、佐藤教頭、阿部事務長、三浦教育企画GL、小林教育推進GL、沢井総務GL、佐藤連携GL、其田小A学部長、佐藤高B学部長
会議資料	開催要項、開催計画、学校教育計画、グランドデザイン、令和7年度学校経営方針、令和7年度学校評価報告書(目標設定)、説明用パワーポイント資料、令和7年度学校案内、神奈川県立学校のコミュニティスクール
議事録	<p>1 開会 (1)学校長あいさつ並びに職員紹介 (2)令和7年度学校運営協議会委員紹介 (3)会長・副会長選出</p> <p>2 令和7年度学校運営協議会 開催計画について (1)学校運営協議会の組織についての説明 (2)年間計画についての説明 3回の学校運営協議会と学校評価部会、切れ目ない支援部会、防災部会を実施する予定である。</p> <p>3 各部会の計画について (1)議題1 学校評価部会 今年度の計画 令和7年度の学校評価に係る目標設定について説明 ・「教育課程・学習指導」では、ICT機器の活用を推進し、授業の充実を図ることが重点目標である。また、近年の夏の暑さに対応して、柔軟に授業の内容等を工夫していく。 ・「児童・生徒指導・支援」では、教員の人権意識の向上を目的とした研修会や、アセスメント結果を個のニーズに応じた指導支援に活かす取り組みを行っていく。 ・「進路指導・支援」では、社会参加に向けた主体的、自発的なコミュニケーションの育成が重点目標である。児童・生徒や保護者への進路に関する情報提供も実施していく。 ・「地域との協働」では、地域資源を活かすこと、地域と学校が総合に支え合う関係を目指していく。また学校コンサルテーションの視点を重視した教育相談等をおこなっていく。 ・「学校管理・学校運営」では、大災害への初動対応を整えていく。また授業準備の時間確保の視点から、業務改善を行っていく。 (意見・質問等)</p> <p>○ 「1 教育課程・学習指導」の目標にあるようにICT機器の活用を充実させてほしい。 ⇒令和7年度は学校の研究として、「ICT機器の活用」を取り上げる。外部講師による研究への助言もいただく予定となっている。またこの分野の専門である大学教授を講師としてお迎えし、研修会も実施する予定である。</p> <p>○ ICT機器の活用の成功事例をどんどん共有してほしい。うまくいかなかった事例をどうやって改善していくのか。 ⇒研究の中で、それぞれの取組状況、アプリ活用状況等を教員間でしっかりと共有していくと考えている。</p> <p>○ ICT機器活用のねらいは、子どもごとに明確になっているのか。 ⇒それぞれの児童生徒のことについて、保護者と共有したいことについては、個別教育計画の中に、ねらいや手立てを記載している。またそれを面談等を通じて伝えている。学校全体の取り組みを保護者と共有する機会は、今後の検討事項である。</p> <p>○ 「1 教育課程・学習指導」にある「めざす将来像の指標」について、保護者はどう関わるのか。 ⇒教員用の資料として、様々な年代の子どもの将来像の指標となる「キャリア教育の構造図」を作成している。作成できたが、活用についてはこれから行う予定である。</p> <p>⇒保護者も活用できる共通のツールができるかは今後の課題である。</p> <p>○ この会においても、その資料を配付してほしい。</p> <p>○ 金目小では、キャリア教育として、児童が1年ごとにシートに記入し、保護者に見せる取り組みを行っている。これを小学校卒業後、中学、高校に送ることになっている。また児童はchromebookを持っており、認知機能を高める「コグトレ」を行っている。また高学年は毎日chromebookを持ち帰って、宿題に活用している。</p> <p>○ 「2生徒指導・支援」の目標に「人権尊重」があるということは、この点に課題があるということか。エピソードを知りたい。 ⇒生徒に対して教員が荒っぽい言葉を使うなどがある。生徒との信頼関係の中で発した言葉だとしてもそこを切り取られたら、誤解を受ける可能性があり、課題があると考えている。また「さん付け呼称」についても、できていない場面がある。児童生徒のプライベートな話題を、他の人に聞こえるように教員同士が話してしまうこともあり課題と考えている。改善に向けて引き続き取り組んでいく。</p> <p>○人権に関するアンケート結果が見たい。 ⇒今回はお示しきれないでの、次回以降、結果をお伝えしたい。</p> <p>○ 「3進路指導・支援」の目標に視覚支援は具体的にどのように対応しているのか。 ⇒例えば、小学部肢体不自由教育部門では、児童が選択できるように、写真カードや絵カードなどを使って意思表出を促</p>

している。高等部知的障害教育部門では、小中学部で学習してきた視覚支援を活用し、スケジュール提示などを行っているが、小中学部に比べると言語指示は多くなる。

○保護者としては、福祉事業所の空きに関する情報を学校に積極的に収集してほしい。

⇒卒業後の福祉事業所の利用は、現場実習を踏まえて、決まっていく。事業所は、現場実習で生徒を見て、受け入れ可能かどうかを検討することになる。そのため、単に空きがあるかどうか、という情報を保護者にお伝えすることはしていない。

○「学校の働き方改革」によって、児童生徒にしわよせがあると感じる。宿泊学習のような体験が削られることが残念。

⇒現在、学校は子育てや介護などで短時間勤務の職員が多くいる。その中で、宿泊学習に引率可能な教員が少なくなっている。また学校に残っている児童生徒の安全も確保する必要がある。校長として、かなり迷ったが、昨年度削減を決めた。子どもと向き合う時間を確保するための業務改善を進めていきたい。

○小学校においても様々な働き方の職員が増えている。子どもたちのことを考えたいと思う教員の気持ちはあるが、業務過多になってしまふ現状があり難しい。

(2) 議題2 切れ目ない支援部会

・令和6年度の活動報告と令和7年度計画について説明

・センター的機能に関する重点的な取り組みとして「学校コンサルテーションにつながる支援」についての取組を説明

○花菜ガーデンと平塚支援学校がお互いにもっと知り合える機会を作れるよい。花菜ガーデンの避難訓練にお客さん役として参加するはどうか。

⇒提案ありがたい。前向きに検討したい。

○「学校での生活と、卒業後の生活とのギャップ」を課題と感じている。平塚支援学校で培った力(ツール)は卒業後どのように引き継がれていくのか。

⇒現場実習の段階で、事業所に引き継いでいる。自分で楽しめることを持っていること、余暇が充実していることが重要と考えている。

○学校コンサルテーションについては、「地域の小中学校の教員はその子どもの教育の専門家なので、主体的に動いてもらう」というのは重要であると感じた。非常に共感した。

○「地域との協働」について、質的にも量的にも課題があるのか。

⇒十分とは言えない。子どもが外に出ていくことができる場所(車いすでも行きやすい、バリアフリー、配慮食が提供される等)が少ないという課題がある。

○その課題解決に向けて、教育委員会だけでなく、行政とも連携を密にできるとよい。

(3) 議題3 防災部会

・令和6年度の取組の報告と令和7年度の計画(自治会防災会議への参加等)について説明

○寺田縄自治会では奇数月に防災会議を実施しており、いざというときに備えての緊急連絡体制も整備している。また要支援者(高齢者)への支援のため、民生委員との連携、防災名簿の整理、防災訓練の計画、防災備品機材の整備等を行っている。防災部会において、学校内の見学をし、防災備品などについても知りたい。

○災害対策だけでなくテロ対策も行っているか。

⇒警察OBと連携して、不審者対応訓練を毎年実施している。

4 熟議 テーマ「社会参加に向けた主体的、自発的なコミュニケーション力の育成を図る」

〈現状〉

・教員が児童・生徒にあったコミュニケーション方法を選択し、それを組織的に指導、支援することが十分にできていないという課題がある。

・例えば、給食の時間、子どもから「もう食べたくない」「ごちそうさま」のサインが出ているにも関わらず、教員は食べるよう促してしまうことがある。

・子どものペースというよりもどんどん食べさせる、となってしまう場合がある。

・絵カードなどが準備はされているが、「子どもがやりたいこと」のカードより、「先生が子どもにやってほしいこと」として使用することが多い。

○「目標」を立てるとき、教員の課題ではなく、児童・生徒を主語にして考えるべきである。コミュニケーションの方法も、「児童・生徒が選択する、それを教員がサポートする」という視点が大事である。

○先生の側から見た課題だけでなく、児童・生徒の側の課題、両方書かれているとよい。

○小学校でも、給食指導では「好き嫌いなく完食することがよいこと」となりがちである。児童・生徒理解研修会などをやるといい。

○児童・生徒ありき、子供を軸に考えることが重要。

○教員の意識を、研修等を通して変えていくとよい。

○ここであがっているコミュニケーションの問題は「人権」の問題もある。当事者の目線を忘れてはいけない。

○意思決定支援は「私のことを私抜きで決めないで」ということである。

⇒本校の生徒は、全員が知的障害であり、コミュニケーションのための支援が必要である。教員が「主体的、自発的なコミュニケーションとはどういうことか」について考える必要がある。

○このコミュニケーションのことについては、第2回、第3回でも継続して考えていくこととする。

5 事務連絡

6 閉会